# 食・農業・村落と吉本隆明

宮　本　孝　二

**キーワード：吉本隆明，食，農業，村落，共同体**

はじめに
第１節　食，ライフヒストリー，家族
第２節　近代化の中の農業
第３節　共同体論の展開
おわりに

## はじめに

本誌今号は社会学部社会福祉学科の石田易司教授と社会学科の清水由文教授の退任記念号であり，お二人の退任後のご健勝を祈念しつつ拙稿を謹んで献呈申し上げたい。

なお，石田教授の専門分野はソーシャルワーク論（なかでも福祉キャンプ論），清水教授のご担当科目は村落社会学（人気ゼミのテーマは食の社会学）であり，社会学科に所属する筆者の研究領域は清水教授の研究領域との接点が多い。また，筆者は清水教授と共に 1985 年 4 月に桃山学院大学社会学部に採用され，以来 30 年以上，同僚として本大学で過ごしてきたこともあり，拙稿では筆者の研究分野の１つである吉本隆明の著作の中から食・農業・村落についての議論を取り上げ，その紹介と検討を行うこととした。

本稿では，まず第1節において，97年の『食べものの話』，2005年の『吉本隆明「食」を語る』，そして2013年の『開店休業』の内容を紹介することを通して，高齢期の吉本が自分史としてのライフヒストリーの中でどの時期の食を想起していたか，また，高齢期の現在形の食の課題をどのように認識していたか，さらには，食のエピソードに現れた家族関係を明らかにし，筆者の吉本論における個人史研究を一層深めたい。

次に第2節では，80年代後半から90年代前半にかけて行われた農業論の連続講演と，その後に執筆された連載エッセイに基づいて，吉本が農業の衰退の必然を見据えた上で農業の未来をいかに展望していたかを紹介する。エコロジー的発想を根拠に農業の保護行政を主張しコメ輸入自由化反対論を唱える議論に対して，吉本は徹底的な批判を加える。国家社会主義の農政はもちろん，資本主義社会における国家による保護行政やエコロジー的統制主義に反対し，資本主義の高度化とグローバル化，そして科学技術の発展に対応しうる新たな農業を展望するのである。そのような吉本の農業論は，独特の資本主義論や科学技術論を背景にしていたことも明らかにしたい。

そして最後に第3節において，村落ないし農村についての吉本の議論の展開を追究する。それは共同体論として吉本社会理論の1つの基軸をなすものであり，近代および現代日本の社会構造における農村の位置づけや，社会の形成における村落共同体のあり方についての多様な議論を吉本は展開したのであった。第1に，近代および現代日本における農村構造と天皇制支配構造との関連についての議論の展開，第2に，60年代後半の『共同幻想論』や「集落の論理」を経て，80年代の「アジア的とは何か」に至るまでの議論の展開を紹介し，吉本国家論への連接関係を明らかにしよう。

## 第1節　食，ライフヒストリー，家族

吉本隆明論は膨大な量にのぼるが，その中には吉本の個人史研究も含まれる[1)]。

1）吉本の個人史研究は川上春雄（1923−2001）に始まる。吉本と川上の交友は吉本

それは著作活動のみならず，そのライフヒストリーや家族史に焦点を合わせたものである。本節では食の問題を題材にした吉本の自分史についての語りやエッセイの内容を整理し，吉本のライフヒストリーと家族史を描き出したい。それではまず，戦後日本最大の思想家と称される吉本隆明の著作活動歴を，これまでの個人史研究に依拠しつつ簡単に紹介することから始めよう。

1924 年に東京で生まれた吉本は，下町で育ち幼少年期を過ごす。家族は九州の天草地方から生活の都合で上京してきたのであるが，上京後吉本は誕生した。小学校を終えた吉本は，東京府立化学工業学校に進学，卒業後は東北地方の米沢高等工業学校に進学し，44 年秋には東京工業大学に入学した。大学生として魚津や東京での勤労奉仕に動員されたが，45 年 8 月の終戦まで生き延び，47 年に東京工業大学電気化学科を卒業するとともに化学関係の企業に就職し，組合運動にもかかわり，退職と再就職を経験し，その間大学に復帰したりもする。そして大学では数学者遠山啓の知遇を得て，先生の口利きで 50 年代後半に特許事務所に隔日勤務の職をえることができた。

そのような中で吉本の詩作と文学研究は急速に進み，自費出版の詩集（吉本，1952 および 1953）によって詩人として名が知られるようになった。次いで同人誌等での作品発表，戦争責任論の展開，最初の単独著作『高村光太郎』の出版，そして 50 年代後半には，60 年の日米安保条約改定をめぐる闘争に向けて大きな思想的影響力を発揮した，文学領域にとどまらない思想的著作を世に問うまでになった（吉本，1959a，1959b，1960）。また，日本共産党に反旗を翻したラディカルな左翼運動（共産主義者同盟，通称ブント）に深く関与し，国家権力に抵抗しつつ戦後日本社会の変革の道を探る詩人，文芸評論家，思想家として吉本隆明の名は広く知られるようになった。

闘争終焉後の 60 年代には，吉本は産業社会に対応できない左翼運動に厳

（2017）に収録された多くの書簡によっても示されている。本稿が参照した石関（2005）や高橋（2003 および 2012）など個人史研究は枚挙にいとまがない。なお高橋（2003）は川上（1972）を引き継いだものである。

しい評価を与え，思想的理論的な修練を重ねた。左翼運動がもはや終焉を迎え，思想的理論的検討を深める時期がきたと吉本は考えたのである。61年に創刊した同人雑誌『試行』を舞台に，『言語にとって美とはなにか』と『心的現象論序説』の原型となる論考を展開し，さらに同時期に『文藝』誌上に『共同幻想論』の原型となる論考を連載し，その他多数の文芸批評，思想論を発表した。『言語にとって美とは何か』と『共同幻想論』は60年代半ばから後半にかけて単行本として出版され，また，『丸山真男論』と『カール・マルクス』という重要な思想家論も60年代半ばに刊行され，ラディカルな思想家吉本隆明の名は一層高まり，67年には勁草書房から『吉本隆明全著作集』全15巻の刊行も開始された[2)]。

70年代は戦後日本社会にとって，高度経済成長の終焉とともに新たな高度産業社会の形成が開始された時代であったが，吉本にとっても新たな対応を迫られた時代でもあった。世界は激動し情況認識，世界認識を吉本もまた絶えず問い直さねばならず，70年に評論集『情況』を刊行し，『試行』を舞台に「情況への発言」を連載した。しかし，原理的な追究もそれと並行して行い，71年に『心的現象論序説』を出版した後も「心的現象論」の『試行』連載を続けた。

80年代に入ると吉本は，『マス・イメージ論』や『重層的な非決定へ』などによって，高度産業化した現代日本社会の状況を解明しようと努め，多種多様な問題や文化をそれぞれ丁寧に把握する努力を重ねた。また『「反核」異論』を発表し，左翼的姿勢の頽廃，文学者の翼賛会的運動を批判し論争を巻き起こした。資本主義は高度化し，国家はそのイデオロギー性，共同幻想性を低下させ機能集団化しつつあり，福祉国家の見直しが始まり，文化は重層化しサブ・カルチャーが表舞台に登場し，家族が変容を開始した時代であった。80年代から90年代にかけて多くの情況分析，資本主義論を吉本は

2）筆者が初めて吉本の著作に触れたのは69年大学1年の時であり，自宅近くの書店で本書を手にして早速買い求めたのであった。

発表し，高度な資本主義についての議論や，それに対応した新たな国家論を展開し，本稿で取り上げる農業論の講演も 80 年代の終わりから 90 年代の初めにかけて行われた。

90 年代になり吉本も 60 歳代後半になったが，80 年代後半に続いて多くの情況分析を発表し続け執筆意欲に衰えは見られなかった。それまで無縁であったマスメディアにも時事的な批評，コメントが掲載されるようになり，さらに本節で取り上げる『食べものの話』のような軽いエッセイの執筆も始めた[3)]。また『わが「転向」』を出版し，60 年代以降の社会変化とそれへの対応について自己総括を行った。そして何よりも 90 年代には最後の理論的な著作『母型論』『アフリカ的段階について』が刊行されたが，61 年に創刊された雑誌『試行』は，吉本自身の高齢化のためもあって，ついに 97 年で終刊となった。

そして，21 世紀を迎え 90 年代半ばから糖尿病の合併症による歩行障害や視力障害をかかえるようになった吉本であるが，語り本ないしインタビュー本によって，その独自の見解を世に問い続けた。本稿が取り上げる 2005 年の『吉本隆明「食」を語る』もその 1 つである。ただしまったく書かなくなったわけではなく，2006 年から 2011 年まで食べものエッセイを雑誌『dancyu』に連載した。しかし 2012 年 3 月，ついに吉本に老衰による眠るような死が訪れた。その死後も講演集や著作集の出版は続いており，最後の連載エッセイは 2013 年に『開店休業』として刊行された。以下，食体験による吉本の自分史ともいうべきこれら三冊の内容を順次紹介し，吉本の人生と家族について見ていくことにしよう。

まず『食べものの話』では，幼少時代の家族との食事，少年時代の買い食い，米沢高等工業学校時代の飲酒，戦中の食糧難時代の体験，戦後の家庭生

3)『食べものの話』は雑誌連載エッセイをもとに 97 年に単行本化されたが，版元の名称が光芒社に変わり，『食べもの探訪記』として 2001 年に増補改訂版が刊行された。本稿では前者を参照している。

活と食事，高齢期の食体験が順不同に語られる。高齢期以外の話は思い出であり記憶であるが，唯一「私が食事をつくるとき」のみが73年のエッセイの再録であり，そこには子育て時代の家庭での食の体験そのものが示されている[4)]。

幼少時代の家族との食事の思い出は，好きな食べものとしてジャガイモ，豆腐，カレーライスが挙げられ，ジャガイモ料理はカレーライスとともに母親の味の思い出でもあり，その後の自らの家庭生活での調理の得意技ともなった。また甘みの思い出として母乳の味にはこだわっている。さらに甘みのもたらす解放感に関連づけて子ども時代の飴玉や米沢時代のおしるこが想起され，戦後の複雑な甘みの増加にも言及され，まんじゅうとあんこということでは，戦前の玄米パン，そして大福餅と祖父の思い出，戦後の井村屋のあんまんなどが語られている。体調不良の時に母親が飲ませてくれた梅酒の思い出も，米沢時代の飲酒体験を語る際に想起されている。

次にきらいなもの，まずいものとして魚料理，マヨネーズ，昔のソースとは異なる多様な現在のソース，そしておからが挙げられる。豆腐は好きなのにおからは嫌いな吉本は，煮魚も苦手である。とはいえ寿司は好物であるが，おからを使ったおから寿司は子ども時代に最も苦手な食べものであった。そして幼少年期のシンプルなソースが確固たる味の記憶であり，自らが築いた家庭生活でのソースの世代間差異についてもしばしば言及する。

少年時代の買い食いの思い出は，食べもののための記念碑に値するとまで激賞するいわゆる「三浦屋の肉フライ」ないし「レバカツ」がある。安価で有効性の高い優れものと吉本が評価する三浦屋の肉フライこそ，少年期の買い食い体験の主役であった。

米沢の高校の寮生活では飲酒を体験した。当時の寮生活では上級生が下級

4）74年の『詩的乾坤』に初めて収録され，筆者はそれを読んだ際に，吉本の確固たる生活思想家としての基盤に触れたと強く感じた。強靭な思想家の根底にある「大衆の原像」（吉本のキー概念の一つ）の現れと思われたのである。

生に歓迎行事として飲酒をいわば強要したようである。また，米沢時代には農家にコメの購入に出向いたものの方言がまったくわからなかったという苦い記憶も語られる。なお，飲酒については戦後の女性の飲酒の増加を，女性の感性的な解放として吉本は高く評価している。

吉本は自らの食べ方を，早食いであり自分勝手に好きに食べることを偏愛していると告白する。早食いは食料不足の戦時中の食体験の影響かと自己診断するとともに，戦時中のまずい食べものの思い出が語られ，さらに，子どもに少しでも多く食べさせようとした親の配慮について感謝を込めて想起している。

戦後の家庭生活と食事については，多種多様な香辛料を近代化が進んだ日本社会への先進社会と後進社会の両方からの贈り物と位置づけ，前述のソースと同様に多様な香辛料の好みの世代の差が論じられる。また唐辛子を使ったキムチとの出会いは終戦直後の在日朝鮮人の闇工場での手伝いの際のお礼代わりの食事においてであったことも思い出されている。また，戦後の家庭生活ではペットとして猫を家族で偏愛していたので，猫の食べもの，猫用の缶詰，二人の娘の猫へのケアについても語られている[5)]。さらに日本の変化する食生活の例として即席カレー，フライドチキンやハンバーガーを取り上げ，即席カレー各種の味比べ体験や，フライドチキンやハンバーガーに見る食生活のアメリカ化についても言及している。

最後に高齢期となった90年代前半の食体験であるが，年を重ねても愛好するお菓子として，食べはじめたらとまらない食べもの，たとえば揚げ餅，せんべい，ピーナッツなどが列挙される。新しいせんべいとしての「ぬれせん」各種の評価も行い，せんべいの歴史を展望している。また，テレビの料理番組批評も行っていた。

なお，『食べものの話』の巻末には「食の原点に還って」というテーマで日本料理家道場六三郎（31年生まれ）との対談が収録されているが，そこ

5）吉本および吉本家は猫好きであった。それについては吉本（1998b）が詳しい。

でもソースの味や，子どものころの味の記憶について吉本は発言している。子ども時代のソースの美味しさの記憶，子育て期や家庭生活におけるソースの変化と世代間の好みの差異，子どもの頃の買い食いの美味しさ，すなわち前述の三浦屋のレバカツなどの思い出である。

次に2005年に刊行された『吉本隆明「食」を語る』はフランス料理研究家の宇田川悟（47年生まれ）による吉本へのインタビューの記録である。そこでは，戦前の幼少時代，戦中時代と敗戦後，戦後時代，家庭生活，高齢期に大きく区分され，それぞれの時代の食の話が吉本の人生の展開と家族の形成と変容と関連づけられているが，想起される時期は『食べものの話』と重なっている。

まず戦前の幼少時代では，九州の天草から上京してきた吉本家が，東京の臨海地帯である月島に居を定め，船大工やボート店を生業とし，住んでいた長屋で吉本が誕生した話から始まり，当時の吉本家の食卓やハレの日のごちそうについての母親の工夫などが語られる。ただし，下町の思い出で食にかかわるのは前述の肉フライを除けば，「駄菓子屋のおばちゃん」くらいにとどまる。

戦中から敗戦後の時代については，前述のように米沢の高校の寮生活での飲酒体験と悪酔い体験，そして果樹園荒し（さくらんぼ泥棒）などの戦時中の食体験が示される。

吉本は東京工業大学に進学し敗戦を迎えるが，大学卒業後は町工場勤めを始めた。食いつなぐための就職であり組合活動の鬱屈や，詩人への道と生活とのジレンマなどが重なり退職したが，特許事務所という隔日勤務の職場が見つかり，またその頃結婚し家庭をもつようになった[6]。その新婚生活や子どもができてからの食の体験は注4で紹介した73年のエッセイでも一部想起されていたが，この時代の画期的な食体験として60年安保闘争の反対デモに参加し逮捕され留置場のカツ丼を味わったことがある（吉本，2005：

6）就職と結婚の経緯などについては松崎（2013：156−78）が詳しい。

110−4)。

50年代後半から始まる家庭生活をめぐる料理については，前述の『食べものの話』では語られていなかった家族からの批判に触れている。61年からの『試行』の発行に吉本夫人の貢献度は高かったが，病弱であったこともあり，二人の娘の幼少期から少女時代までは，吉本が買い物をして食事をつくるということが多かったようだ。自宅で仕事をすることが多かったこともそのような生活を形成させたのであろう。買い物し食事をつくる吉本，病弱の夫人をいたわり二人の娘の面倒を見る吉本，そのような生活の中で次々と重要な著作を世に送り出す吉本という，生活者の基盤をもつ思想家吉本のイメージが生成された。しかし，後述のように吉本のその振舞いに夫人は異論があったようだ。そして，70年代初めには二人の娘からの父親の料理へのマンネリ批判を受けたこと，食における親子の断絶体験が語られ（吉本，2005：121−5)，その頃から上野界隈飲み歩き，食べ歩きが盛んになってきたことが告白されている。

そのような食生活が災いしたのか，70年代後半から糖尿病が進行していき，90年代半ば以降の身体の諸障害につながっていったようだ。吉本（2005：172−81）では，食欲を抑制できないつらさを語り，漱石や鷗外をも引き合いに出して食い意地の呪縛に触れ，宮沢賢治も大食いだったことにも言及している[7)]。

以上の宇田川によるインタビュー後すぐに，吉本は食にまつわるエピソードを思い出すままに書き記したエッセイの執筆を雑誌『dancyu』に依頼され，亡くなる1年前まで連載することになった。さすがに終盤は休載も続いたようだが，なんとか最後の「梅色吐息」まで書き上げ，翌2012年3月に亡くなったのだった。それから1年後に，長女の漫画家でエッセイストのハ

7）最終章ではフランス料理論を宇田川と交わしているが，吉本はコース料理や会席料理はその拘束感のゆえに苦手であること，フランス料理には得体の知れなさがあることを強調している。

ルノ宵子による追想文を各エッセイに付して刊行されたのが『開店休業』であり，そこには『食べものの話』と『「食」を語る』で紹介されなかったエピソードが見られるだけでなく，娘の視点からの晩年の吉本像が活写されていて家庭生活の実態の一端がうかがえ非常に参考になる。

幼少年期の思い出としては，三浦屋の肉フライ，大福餅，カレーライスとジャガイモ好き，母乳の甘み，恐怖の「おから寿司」，煮魚嫌いなどのすでに前二著で紹介された話もあるが，新しい思い出として，正月のお餅の支度や七草粥，母のかき揚げ汁，焼き蓮根，東京湾岸の海苔採取やあなご釣り，月見だんご狩り（お金持ちの家のお月見のお供えを子どもたちで勝手に食べに行く），小学校でのクリスマスケーキ，父とのたい焼き（弟誕生時の自宅をあけての親子での時間つぶし），焼きそばの話などが登場する。

米沢時代では相変わらずの飲酒体験，さくらんぼ泥棒が紹介されるが，新しいものとして「陸ひぢき回想」と「陸ひぢき迷妄」，すなわち「陸ひじき」と記憶していたが実は「うこぎ」のことだったという話がある。

新婚時代から子育ての20年間についてはアジア的な香辛料にかかわって，時代の変化や家族内の世代の差異やグローバル化の影響が前二著同様に語られるが，前述の73年のエッセイに登場する新婚時代および子育て時代の得意料理「豚ロース鍋」が一層詳細に想起されている。ただし，ハルノ宵子の指摘では，その発明をめぐる夫人との見解の相違があったようである（吉本，2013a：28−9）。また，留置場のかつ丼体験に加えて，留置場での差し入れ食をめぐる一種せつない体験（吉本だけにおにぎりが配給されなかった思い出）が新たに想起されている。さらにこの時代の買い出しおよび調理体験からくる野菜の品定めの話，そして野菜をめぐる人類史的考察，消滅する習慣としての節分への感慨，非アルコール飲料への挑戦体験なども新たに言及されている。

なお，70年代後半に糖尿病と診断された吉本は，それでも前述のように食欲を抑えがたく，厳しいカロリー管理をする吉本夫人の目を盗んでの買い

食いを行っていた。ハルノ宵子の回想によれば（吉本，2013a：46−47），落ちていた外食のレシートで露見した買い食いは夫人の怒りを買い，吉本のカロリー管理は放棄される。そんな吉本は甘みの不思議を語り，糖尿病との闘いへの敗北を語る。80 年代から 90 年代にかけて糖尿病は進行し，96 年の溺死しかけた事件はおそらくそれに起因する歩行障害や体調不良がもたらしたのではないかと思われる[8]。その事件から急速に衰えていく 10 数年が吉本の晩年期である。その時期については前二著の内容との重複が多いが，新しい話題として老人銀座の塩大福やあごを動かす食べ物としてのグミとの出会いが語られる。またこの時期の吉本はカップラーメンを愛好しており，ハルノ宵子によれば野菜トッピングの「きつねどん兵衛」が吉本の最後の晩餐であったという（吉本，2013a：250−1）。吉本の連載も最後のほうの「鬼の笑い声」で老衰の悲しみが語られ，最終回の「梅色吐息」では梅干にしか感じられなくなった味覚の衰えが述べられていた。

糖尿病と老衰により足腰が弱り歩行障害をかかえ視力障害も進み読書も執筆もままならなくなった晩年の吉本であるが，それでもインタビューや聞き書きの要請は多く[9]，それらによく対応していた。食生活を中心とする日常生活全般は，幸いにも長女の漫画家ハルノ宵子が全面的に面倒をみてくれ，相当の料理の腕前であった彼女のおかげで吉本の食生活は充実したものであったと思われる。50 年代半ばに夫人と知り合い同棲を経て 57 年に入籍しすぐに生まれたのが長女の多子（さわこ）だが，彼女は 96 年の事件以降に漫画家活動を休止し，高齢期の吉本夫妻の食生活を含めた日常生活全般を，2012 年に夫妻が相次いで亡くなるまでケアするというきわめて重要な役割を担うことになったのである。

ちなみに次女の真秀子（まほこ）は 64 年に誕生し，80 年代には日本大学

8）伊豆の海での事故については吉本隆明・吉本ばなな（1997）に娘のばななの詳細な記述を見ることができる。
9）晩年のインタビュー記録は多いが，『ほぼ日刊イトイ新聞』を主宰する評論家の糸井重里の貢献も大きい。

芸術学部を経て，小説家吉本ばななとしてデビューし，その後も次々と作品を世に送り出し，世界的にも著名な小説家，エッセイストとなった[10]。吉本とばななの対談集（吉本・吉本，1997）を読むと，吉本家のなごやかな家庭の雰囲気がよくうかがえる。そして，吉本夫人は吉本の死後数か月後に亡くなるが，その前に句集を出版しており，結婚前には小説も書いていた[11]。しかし，吉本の要請もあり家庭に入ってからは筆を折り，子育てと同人雑誌『試行』の事務全般を長年引き受けたのであった。夫人は吉本が前述の73年のエッセイで買い物と食事の用意に活躍するイメージを読者に植え付けたことには前述のように異論があり，吉本の食事の工夫や調理の腕前も夫人の評価するところではなかったようだし，ハルノ宵子も吉本の調理下手，ユニークだが雑な方法での調理は家人に評価されなかったと述べている（吉本，2013a：34−5）。しかし，以上のように吉本の食体験を基軸にその人生と家族の歴史を振り返ってみると，圧倒的な著作活動と並行して家族をもち家庭を営み，どこにでも見られる家族のドラマを形成した吉本の偉大さと平凡さの共存が明らかとなる。

さて，吉本の好物にはお米（以下コメと表記）もあった。コメの美味しさはお鮨，丼物，そしておじやにあると『食べものの話』では述べている（吉本，1997：30−6）。そこでは，戦時中のコメの買い出し時の東北の農民とのコミュニケーション不能体験から連想された，戦後のある時期の言語障害のある人をめぐる講演時での軋轢体験が語られるとともに，東北のコメ作りの苦労と工夫にも言及しており農業への関心が示されていた。次節では吉本の農業論の全体像を探ることにしよう。

---

10）吉本ばななは現在では「よしもとばなな」という表記になっている。なお，よしもと（2017）に吉本隆明の個性的な料理についてのエッセイ「まず焼きたまご」が収録されている。

11）夫人の吉本和子の晩年の句集刊行の経緯については石関（2005：187−88，249）で知ることができる。

## 第2節　近代化の中の農業

80年代後半から90年代初めにかけて，吉本は長岡市で活動する同人誌『修羅』に招かれて三つの講演を行なった。87年11月の「農村の終焉――〈高度〉資本主義の課題」，89年7月の「日本農業論」，91年11月の「農業から見た現在」であり，吉本（2015）にすべて収録されている。順次その内容を紹介しよう。

「農村の終焉――〈高度〉資本主義の課題」（吉本，2015：37−102）では最初に，農業問題が資本主義の高度化に伴って生じてくること，農業問題をどうとらえるかをめぐってイデオロギー的な議論の混乱が見られることを指摘する。後述のエコロジー的迷妄や保守主義的ラディカリズムである。吉本は現実に即した議論が必要であるとし，当時の最新の86年度版『農業白書』に依拠し検討を進める。

そこで明示されているのは農家の戸数も農業人口も収入増加率も低下トレンドにあることであり，専業農家の家計費の減少傾向も明らかにされていた。そのような否定できない事実は，資本主義の高度化に伴い，農業が相対的に衰退する産業とならざるをえないことを示していると吉本は主張する。

それでは農業はどうすればよいのか。吉本はその問題と食の問題，食生活の変化の問題とをかかわらせて，第1節で紹介したソースの好みと世代差の問題に言及しつつ，食生活の洋風化と加工食料品の増大という傾向の中では，農業が農産物加工や健康農産物生産にシフトせざるをえないと指摘する。農業は消費の変化への対応，グローバル化への対応をしていかなければならないというのである。

吉本はまた，農業の生産構造における施設型と土地利用型との分化，零細と大規模化との分化のトレンドを指摘し，日本列島の地域の差異と農業の変化との対応について論じつつ，農業が人々に貧困を強いないためには，農業の労働生産性を機械化や農薬活用などの新技術の進歩の成果を生かし向上さ

せること，農業人口と農業戸数の減少は不可避だが豊かな農家が登場する可能性は高いこと，そのための条件として保護的な農政は撤廃しなければならないことを主張する。

さらに円高の農業への影響について吉本は次のように議論を展開する。農産物の輸入品は安くなり，輸出は苦しくなる状況がもたらされることから，輸入農産物の価格は低下するので，そうなると国内農産物の売れ行きに影響が生じる。しかし，輸入に依存する農業用機械や肥料や農薬や飼料が安くなると，農業の生産コストは低下する。しかし，農産物輸出が苦しくなると農家の収入減につながる。

こうして前述の対立する二つのイデオロギー的傾向を吉本は批判する。保守と革新の農業論は，革新の側は保護農政に固執するばかりで問題外だし，保守主義的ラディカリズムも1873年地租改正と農業市場の全国的成立，戦後のマッカーサーの農地改革に続く第3の農業革命を実施するだけの力はない。革新の側，すなわち左翼の鉄則は，国家よりは資本，資本よりは労働，労働よりは消費者という高度資本主義に対応した鉄則であるべきなのにもかかわらず，高度資本主義の技術文明を否定しエコロジー的世界を実現しようなどと提唱する傾向がある。しかし，消費者としての大衆の生活の達成点を逆転させようとするのは文明史の必然に反する。また，保守主義的ラディカリズムの論議は資本主義的な見地からする革命的な議論であり，大規模化，資本主義的競争，農地税金優遇の廃止，輸入規制撤廃，農協解体といった方向を提唱するが，そのような革命的政策を保守政府が実施できるはずもない。その方向へと進むことは不可避だが政策的に実施することは保守政府には不可能であると吉本は予測するのである。

では日本の農業，農家はどうすれば良いのか。次の「日本農業論」（吉本，2015：103−35）では『農業白書』や『国民生活白書』などをもとにしてその検討を進める。

当時の農業問題として米価統制と輸入自由化の問題があった。この問題で

は保守対進歩の構図となるが，食管法や食管制度を守れという左翼は間違っているというのが吉本の一貫した主張である。左翼は一般大衆の原則，すなわちイデオロギーとは無縁に安くておいしいコメが一番だという原則に従うべきだと左翼を批判する。左翼は国家社会主義のような農業の国家統制を金科玉条とし，何よりもマルクスが農業の国民的管理と共同耕作を提唱したと主張するが，それはマルクスの時代のアメリカの大規模資本主義農業への対抗という条件下でのことであり，マルクスは農業の国家管理一辺倒では決してないことと，実際に国家社会主義のソ連の農業において個人的経営の割合が当然ながら最も少ないのに生産高は個人的経営が大半を占めることを吉本は指摘する。

吉本は農業の理想像は自立農民であると主張する。それは戦後の農地改革以来の日本の農業と農民の姿だ。しかし，同時に吉本はそのような農家が現代日本において衰退の道にあることは必然であると考える。農業の未来は自由化への対応にしかないと言うのである。

そして三番目の講演「農業から見た現在」（吉本，2015：136−79）では，ソ連の農業問題から議論を始める。ソ連は社会主義国家を自称していたが，ソ連は社会主義の名に値しないと吉本は批判する。ソ連は国家の問題と農業・土地制度問題だけ見ても社会主義ではない。社会主義の三本柱は，国家を開く，国家の軍隊を廃止する，そして各農家のプラスにならなければ公有国有はやめる，ということにほかならず，ソ連はすべて不合格だというのである。そしてそのようなソ連は 91 年のクーデターを契機に連邦体制が崩壊し，各民族共和国が独立し，国家社会主義の終わりが訪れたのであった。それまでにも前述のように，農業の土地制度では個人所有が最小にもかかわらず個人経営農家が大半の生産高を生み出していたのではあるが。

吉本は次にアメリカを論じる。しかし，アメリカの農業を論じているのではない。アメリカが日米構造協議で日本の産業構造の変革について，したがって農業構造の変革についても強烈な要求を突き付けていることに言及し

ている。また，90年に発生したフセイン大統領のイラクによるクウェート侵攻事件とそれに対するアメリカの対応を取り上げ，イラクもアメリカも両方間違っていると断じる。今時他国の領土を侵略して自分のものにしようとか，それに対して暴力で制裁しようというのはだめだ。吉本は憲法9条をもとに経済力で調停すべきだと主張する。そのようなアメリカが日本には日米構造協議では農業問題にも触れ，次のような要求をしている。保護農政をやめ，そんな予算があれば都市や交通やネットワークに投資し，また農地の税金も高くして売買促進しろというようなアメリカの日本への要求は間違ってはいない。バブル経済が崩壊しても資本主義が終わったわけではなく，資本主義の高度化は続くし，そのようなトレンドの中で日本の農業はどうあるべきかを考えねばならないと，吉本は主張するのである。

日本がなすべきはコメの貿易自由化であり，進歩した農業技術を活用した大規模農業であり，そうして日本の農業はグローバルな競争に勝ち抜けるようになる必要がある。日本の食料自給率の完全自給化などありえないし，グローバル化の中で食糧自給などは不必要である。そして未来の農業像は，グローバルな分業と贈与ということになり，日本は不要な農業を廃止し，グローバル競争と消費者の高度な要求に対応できる農業だけは残るだろうと，吉本は展望する。

以上，80年代末から90年代初めにかけての三つの講演内容を紹介したが，その後93年から95年まで雑誌『サンサーラ』に「情況との対話」を連載した際[12]，93年から94年にかけて断続的に「コメの話とはなにか」「コメの話をもう一度」「平成の米騒動」を発表した（吉本，1995c）。順次その内容を紹介しよう。

まず「コメの話とはなにか」（吉本，1995c：201−12）では，93年に日本がコメ凶作となり，コメの緊急輸入が行われたという出来事から話が始ま

12）『サンサーラ』は徳間書店発行の月刊総合雑誌で，90年7月に創刊号が出され，97年4月に最終号が出された。

る。コメ輸入は農業関係者の最も忌避していたことだったが，そのような中，作家の井上ひさしが『コメの話』を刊行し，日本の農業，とくにコメ農業を守るためにはコメの輸入自由化に絶対反対の立場を表明した。そんな井上に吉本は二つの批判点を突きつける[13)]。第1に，井上の言説は農政担当の支配者または指導者の口調になっており，国家主義的な色彩を示している。第2に，補償金や補助金次第で農業人口，農業生産高を上昇させうると錯覚しており，高度資本主義の社会で農業を保護行政で盛り立てることができるという錯誤に陥ってしまっている。保護行政を提唱し貿易自由化に反対するエコロジストや農本主義者の主張の前提にある国家主義は間違っており，人類にとって国家経営より資本経営のほうが進歩的で適切であるに決まっていると吉本は強調する。しかも，井上は農業が環境保全に貢献し，工業は環境破壊につながるというように工業悪玉説を提唱するが，工業なしに現代社会の生活は成立せず，人類は貧困からの離脱を目指し産業化を進めてきたのであり，それは農業人口の減少をもたらさざるをえないのである。井上は農薬使用についても，アメリカ産農産物は危険性が高いというが，農薬を含む特許事務に携わってきた吉本からすれば，それは何の根拠もない妄説である。

吉本の原則は前述の講演でも繰り返されていたように，国民大衆一般は安くて美味いコメを選ぶのが当然で，経済的に豊かでなければまずくても安いコメ，豊かであれば高くても美味いコメを選ぶということ，そして農業人口が緩やかに減少し，人類が貧困から脱していくのは自然史的な必然であるということであった。また，井上は水田のダム効果，景観と環境の保全効果を強調するが，水田農耕の開始こそ天然の景観と環境の破壊であったことを忘れてはならず，水田のダム効果が十分ならダム建設はなされなかったであろう，人類の文明化とはそういうことであると吉本は論駁する。

---

13）井上ひさし（1934–2010）は著名な小説家であり優れた劇作家でもあったが，『コメの話』（新潮文庫，1992年）への吉本の批判は激しく93年12月発行の『試行』72号の「情況への発言」でも同じ主張を展開している（吉本，2013b：638–41）。

吉本は，政府や企業資本が減反政策を採用したり，コメ市場を自由化して国内農家に競争を強いるから日本の水田がつぶれるのではなく，それは文明の高度化がなせるわざだと改めて強調し，だからこそ農民に転業の意思があるなら，転業の精神的苦痛を和らげ，職業選択の自由を助けてあげることの必要性を提唱する。グローバルな規模で見るなら日本は，国際的な農業担当地である必要はなく，世界的な贈与経済システムにおいてなすべき役割があると吉本は繰り返し主張するのである。

以上の議論を受けて，吉本は続いて「コメの話をもう一度」（吉本，1995c：213−21）を執筆した。まず，コメ自由化の部分的受け入れは何も問題はないと主張し，先進的な地域国家ではおもな社会問題や政治問題は工業，製造業，建設業のような第二次産業と第三次産業の境界面，また都市と超都市との対立の課題に移行していると指摘する。コメの自由化で自由な農家も兼業農家も損失を受けず，損失を受けるのは農協と食管法であると判断した吉本は，当時の連立政権が農協の反動的な農業イデオロギーに遠慮し，実効的な農業政策を打ち出せないことを批判する。

吉本から見れば，解決策はきわめてシンプルであった。コメ自由化は必然であるから，農家が市場自由化によって損失があれば具体的な救済策をとればよいのである。その救済策は第1に，転業希望農家への十分な補償であり，第2に，市場自由化，国際的な価格競争，品質競争に耐えうる農業体質をつくりあげることである。農業存続希望農家には十分な助成と補償を実施した上で，農地買い上げによる大規模化と集約化，そして高度技術化による新たな農業が展開されなければならない。

そのような民間の農家の新たな試みを吉本は紹介する。栃木県鹿沼市の農業公社と秋田県大潟村の集約農業体である。農業公社は農家が土地を貸出し，集約化し大規模化した農業であり，集約農業体は機械化による大規模耕作を実施し生産者協会が自由米を扱っている。農協は農業形態が資本主義化することを悪業のように言うが，農協による独占的な制御と金融支配の維持

が，農業の耕作と運営と加工の高度化に民間資本が介入することと比べて特に良いわけではない。

国際競争に負けないためには，大規模化し機械使用の効率をよくして生産性を高める必要があるという農水産省の農業改革案の骨組みは間違ってはいないと吉本は判断する。すなわち第１に，農業の大規模な機械的な耕作や収穫法が可能になるように農地を集約化して生産性を高める。第２に，農業の資本経営を拡大し農産物の価格を国際水準並みに安価にする。第３に高度の技術性を農業に導入し農産物の品質や生産量を高める。そのためには民間の協同ないし共同経営体の創設，食管法の廃止と農協の解体的縮小再編，離農希望農家の土地処分援助，転業転職保障，非農家の耕作地の有利な譲渡，農業とその生産物にまつわる高度技術を開拓し導入する研究・調査・実験の設備の拡大などを行い，国際競争の中に乗り出していく体制づくりをしなければならない。国家管理型農業は不要だが，農家の自主性を国家や公共体が制約しないという原則のもとに，個々の農家の利益になる生産手段を国家や公共体が提供することは不可欠である。

『サンサーラ』連載の農業論の三つめは「平成の米騒動」である（吉本，1995c：222−39）。まず，1918 年の米騒動について触れ，それが近代日本では明治初年の地租改正後の農民の騒動に続く農業にかかわる社会運動，社会変動であることを述べつつ，平成の米騒動に言及する。吉本はこの平成の米騒動は，米騒動に値しないと考える。なぜなら輸入米も備蓄米もあり，消費者にとって不安な情況はない。輸入米ないし貿易自由化で農民失業ということも起こらない。今回の米騒動の原因は，食管法を後生大事にする食糧庁の国産米と輸入米のブレンド販売方針の通達にあった。輸入米の消費を促進するために強制的に国産米とブレンドして消費者に買わせようという過剰な介入は，自由な選択権の侵害であり，根本的に行政の錯誤である。消費者は安くて美味しいコメを求めており，安くてもまずければ高くても美味いコメを買う場合もあろう。それに国産米が美味しく，輸入米がまずいというのも根

拠がない話だ。外米，たとえばタイ米も料理次第で美味しく食べる工夫はいくらでもある。結局のところ食糧庁が通達を訂正したのは正しい対応だが，その背景には自由米業者の活躍もあると吉本は指摘する。

平成の米騒動には一種のゆとりがあり，これを自由化反対，減反政策反対に結びつけて扇動している古臭い左翼的発想がおかしいのだと吉本は厳しく批判する。業者が買いだめするくらいは何の問題もない。現在の日本の経済の段階で消費者民衆がコメ不足で飢えることなど絶対にありえないし，農業が産業構造内の割合以上の重さで日本の民衆の経済生活に関与してくることもありえない。また食糧庁や農協や食管法がこれ以上農家や都市消費者への支配を強化できる事態も今後起こってはならないと，吉本は結論づけるのであった。

以上のような農業論の展開は，吉本の資本主義論と科学技術論に基礎づけられている。まず資本主義論から見ていこう。50年代末から60年にかけて日米安保条約改定をめぐる闘争が生じた際に，吉本は反米愛国路線に反対し，安保改定によって米国から自立しようとする日本国家独占権力への闘いという認識に立って，第1節でも紹介したように，若い左翼運動家たちの組織である共産主義者同盟（ブント）と連携して運動に参加したのである。この60年代の吉本の資本主義論は，基本的にはマルクス主義的であり，国家独占資本主義は自明の前提として，それに対してどう自らを位置づけるかが考察された[14]。革命論争においても運動のあり方が争点であり，資本主義論それ自体については問い直されることはなかった。マルクス論も展開したが，疎外論的，幻想論的なマルクス解釈という独自な視点の提示であり[15]，

14）ブントのリーダーの一人である姫岡玲治（後に国際的に有名な経済学者となった青木昌彦の当時の筆名）の論文を評価した「戦後世代の政治思想」（吉本，1969a：28−46）を60年に『中央公論』1月号に発表した。

15）マルクス論は「マルクス紀行」（『図書新聞』64年766号から772号まで連載）および「マルクス伝」（64年刊行の『20世紀を動かした人々1世界の知識人』講談社に収録された「カール・マルクス」）であり，吉本（1966a），吉本（1969b）に収められた。

資本主義という概念の洗い直しは70年代の始まりを待たねばならなかった。

70年代に資本主義の高度化が顕著となる前から，吉本にとって資本主義は克服すべき対象ではあったが，国家社会主義に比べれば人類にとって比較的ましなものとして位置づけられていた。たとえば，資本主義は創造者を抑圧せず，才能があり商品的価値があればそれを伸ばし，自由な発想を許容するといった評価である[16)]。同時に吉本は，社会主義国家を激しく批判し続けていた。そのような経緯からすれば，資本主義の高度化を前にして吉本が一層積極的な評価に転換していったのは不思議なことではなかった。

80年代になって，吉本の資本主義論は積極的な展開を見せ始めた。新しい段階の消費資本主義のもつ積極的意味が明らかにされ，第三世界の飢餓や貧困の存在を強調し資本主義社会日本を搾取者として否定し去る一面的な世界資本主義的解釈は，断固退けられることになった。第三世界の貧困の主要な責任は当該第三世界国家の支配体制にあり，その責任を高度資本主義社会日本の大衆に押し付けるのは甚だしい誤謬である。また，消費を敵視し，高度消費社会の大衆を蔑視する左翼知識人的発想を吉本は批判し，大衆の解放にこそ資本主義の変容の意義を見出したのであった。前述の農業論の連続講演も「コメの話」の連載も以上の文脈の中での議論の展開であり主張なのであった。そして95年には『わが「転向」』を発表し，資本主義の変容への正確な認識と対応が「転向」をもたらしたと述べ，72年頃が資本主義の転機ではなかったかと回顧している[17)]。

そのような高度資本主義を超資本主義と吉本は命名し，国民大衆と企業体の選択消費が景気を左右すること，消費を敵視する清貧の思想やエコロジー

16）ラディカル・リベラリストであり，反国家主義者であることが吉本の一貫した立場であり，決して反資本主義ではなかった。その一端は吉本（2013b：105，186−7）にうかがえる。

17）58年に『現代批評』創刊号に掲載され，その画期的視点で大きな影響力をもった「転向論」（吉本，1969a：5−27）では，社会の変化に対応した思考転換は表面的には転向だが転向ではないと主張されていた。『わが「転向」』にはその主張が一貫している。

などによる倫理的脅迫は無意味であること，税金は消費税に重点を移すべきであること，個人消費の増大をはかるために第三次産業への公共投資こそが求められることなどを主張した（吉本，1995c：7−65）。高度資本主義は消費資本主義であり，そこでは選択消費の力を大衆が握ったのだ。それまでの社会主義革命が成し遂げえなかった成果を，資本主義に生きる大衆が実現したと吉本は考える。ただし，高度化した資本主義が最終段階というのではない。たしかに資本主義は人間の自然的な欲望の帰結であり，そこには自由の余地があり多様な創造がもたらされるが，この資本主義の方向性を生かしながら，その病理を癒していく道しかないということである。

左翼や進歩派には社会問題の根本的原因を資本主義に強く求める傾向があるが，それだけではなく産業主義にも敵意を向ける傾向がある。前述のように，吉本は反原発やエコロジー運動を反文明的退化思想として激しく批判する。理科系知識人でもある吉本は科学技術を高く評価し，資本主義が文明，技術，文化の創造を促進してきたこともまた評価するのであり，狂信的非科学的な環境主義を徹底的に批判する。技術への盲信も嫌悪もなく，技術のもつ力，人知の蓄積への信頼があるのみである[18]。そして「エコロチズム」という造語で環境主義の迷蒙性を指摘する（吉本，2013b：533−41）。実際のところ，地球環境は危機に直面していると思われるが，吉本は化学専攻のためもあり科学技術の役割と可能性を重視し，環境問題はいずれ技術的に解決できると主張する。したがって，環境運動や反科学技術運動への評価はきわめて低い。60 年代の反公害運動に対しても，感情的で政治的な要素を指弾し，あくまで科学技術的に問題を把握するべきことを主張していたのだった（吉本，2013b：85−6）。農業への高度科学技術の積極的応用を提唱したのも当然と言えよう。

18）ただし吉本は，農業の原型である「直耕」の精神，すなわち自然との直接的交流の意識が人類にとって重要だとも指摘している（吉本，2015：183−206）。それはアフリカ的段階論（吉本，1998a）にも通じる視点だと思われる。

## 第3節　共同体論の展開

前節で紹介した講演「農村の終焉」では資本主義の高度化の中での農業の運命について議論が展開され，村落という意味での農村について論じられているのではなかった。農地問題は取り上げられていたが，地域社会の問題がテーマではなかった。また吉本は村落に関心を持っていたがそれは共同体論の展開においてであり，したがって吉本の農村への関心も，共同体ないしその累積としての農村社会構造なのであった。こうして吉本の共同体論は，第1に戦前から戦後にかけての天皇制支配構造と農村社会構造の関連について，第2に歴史的過程における社会形成について展開されることになったのである。

第1の問題から見ていこう。農業論講演と同時期に吉本は講演「日本人の「場所」――象徴天皇制と高度資本主義社会」（吉本，1992：184−200）と宗教学者の山折哲雄との対談「昭和天皇とその時代」（吉本，1992：173−83）において[19]，近代と現代の天皇制の変動と農村社会の構造変動との関連について興味深い指摘をしている。

講演「日本人の「場所」」では，天皇制を農耕社会と関連づけるという視点を提示した上で，近代天皇制の起源は地租改正と連動していると論じる。すなわち，旧憲法の規定になった近代国家における天皇制は1883年の地租改正と対応しており，地租改正まで日本はアジア的専制国家の貢納制であり農産物で納めるのが古代からの長いしきたりだったが，地租改正でそれが現金に変更され，農産物を農業市場でお金に交換して税金を納めるため，統一的な日本全体の農産物市場が成立し，さらに地租改正で税率が下げられ，農業の近代化が促進されることになったというのである。そして，国民統合の

19）講演は88年7月8日に行われ『神奈川大学評論』第5号（89年2月27日発行）に「象徴天皇制と高度資本主義社会―日本人の「場所」」というタイトルで掲載された。対談は91年1月に共同通信社により配信され，新潟日報や高知新聞等地方新聞に掲載された。

象徴となった戦後の天皇制は農地改革に対応しており，戦後革命ともいうべき農地改革による農村社会の大変動が，農本ファシズム的な支配構造を根底から崩してしまったのであり，日本の農村社会が終わる時，象徴天皇制は滅びるだろうと予測している。

そして対談「昭和天皇とその時代」でも吉本は，同様の趣旨の発言を農業論とも関連づけながら次のようにしている。「ぼくは天皇制の推移を考えるばあい，農業問題と関連させてみているんです。明治六年に地租改正がある。改革の目安としてはアジア的・古代的な物納制・貢租制の農業を金納制にして近代的な農業市場を開発したというのが地租改正だとおもいます。それは多分，明治天皇のよって立つ社会的基盤を象徴していました。そうかんがえれば，戦後の昭和天皇のよって立つ基盤を象徴しているのは，もちろんマッカーサーの農地解放ですね。土地を小作農に開放し，大地主をなくすのは，占領軍が主体となってやってのけたたいへんな革命ですが，これは戦前の神聖天皇から戦後の象徴天皇への変化のはっきりした目安です。

平成の天皇は見かけ上は象徴天皇の延長ということになるのでしょうが，おなじ次元の目安を考えれば，第三次農業革命が大問題になるとおもいます。これは現在，既にたいへんな課題として本当はあるんです。それがないかのごとく進歩派・保守派ともに装っていますが，第三次農業革命というのはたぶん必至なんです。これはコメの自由化とか貿易摩擦問題とか都市の膨張の問題であり，それに対抗する自然保護やエコロジーの問題です。

これに対して，そうじゃない，農業などつぶしてしまえとか，あるいはぼくらのような，いや天然自然よりももっと本質的な自然は作れるし，つくらなくちゃしょうがないんだというかんがえ方がせめぎ合う，ごまかすことのできない大問題で，そこでは象徴天皇制の基盤が問われるとおもいます。

大都市化・高度情報化の波のなかで，それに対応する農業革命とのかね合いのもとに象徴天皇制の基盤はだんだんなくなっていきます。その命運が決まる見通しが出てきたところで，いま昭和の天皇が亡くなり，次の天皇に譲

位するというのが僕の理解の仕方なんです。」（吉本，1992：176−7）

このような農村の構造変動と天皇制支配構造を関連づける視点は，実はすでに50年代後半に執筆され，吉本（1969a）に収録された「街の中の近代」「天皇制をどうみるか」「日本のナショナリズム」などですでに提示されていた。

58年の「街の中の近代」では[20]，社会構造がどうなっており，どのように動いていくかは，基本的には，農村の構造と権力・反権力の構造によって決まり，そのような社会測定の基本的な条件を本質的なところで規定するのは法制のイデオロギーであるという基本的視点を提示し，法制のイデオロギーは何によって規定されるのかと問い，それは社会に生きて動いている人間の意識と，その意識を生み出す母体である生きた社会現実そのものであると答えている。すなわち支配的イデオロギーと社会現実である経済構造と政治構造とが相互に規定しあっており，農村の構造が戦後に大きく変動することによって支配的イデオロギーも変化したのだという視点である。

59年の「天皇制をどうみるか」では[21]，憲法を超越する法制が存在しない限り，天皇制は墓場から復活できないと吉本は明言し，大衆のほんとうの姿を決定するものとして，政治的な支配による作用のほかに，もう一つ社会の経済構成が考えられるが，すでに日本の農村の経済構成のなかに半封建的な要素はなくなっていると判断できるので，戦前の天皇制の復活は不可能であると推論しているのである。

64年の「日本のナショナリズム」では[22]，戦前のナショナリズムの諸相と農村の変化との関連について次のように議論を展開している。

昭和期に入って，大衆のナショナルな心情は，農村，家，人間関係の別離，幼児記憶などに象徴される主題の核そのものを「概念化」せざるをえな

20）「街の中の近代」は，『東京大学新聞』58年4月30日号に掲載された。
21）「天皇制をどうみるか」は，『夕刊読売新聞』59年5月20日号に掲載された。
22）「日本のナショナリズム」は筑摩書房から64年に刊行された吉本編集の『現代日本思想体系4　ナショナリズム』の解説として発表された。

くなるところまで移行した。知識層のナショナリズム思想によって，直接に大衆のナショナリズムが表象されるものだと錯覚している見地にとっては，あるいは意外におもわれるかもしれないが，大衆のナショナリズムが「実感」性を失ってひとつの「概念的な一般性」にまで抽象されたという現実的な基盤によって，はじめて知識人によるナショナリズムは，ウルトラ＝ナショナリズムとして結晶化する契機をつかんだのである。大衆のナショナリズムが心情としての実感性を失ったということは，すでに村の風景，家庭，人間関係の別れ，涙などによって象徴されるものが，資本によって徐々に圧迫され，失われてゆく萌芽を意味している。このような意味での資本制化による農村の窮乏化と圧迫と，都市における大衆の生活の不安定とは，知識層によってウルトラ＝ナショナリズムとして思想化され，それは満州事変以来の戦争への突入や一連の右翼による直接行動の事件の思想的な支柱を形成したのである。

大衆のナショナリズムの心情的な基盤の喪失こそは，知識層がナショナリズムを思想としてウルトラ化するために必要な基盤であった。支配層は，これに対して，経済社会的には大衆のナショナリズムの最後の拠点である農村，家族にたいする資本制的な圧迫と加工を加え，政治的には，大衆のナショナリズムの「概念化」を逆立ちさせたウルトラ＝ナショナリズムである天皇制主義によってこれに吸引力を行使したのである。

また，政治思想としてのナショナリズムが大衆のナショナルな核を包括できなくなり，農村の資本制化に対応するような生産力ナショナリズム（社会ファシズム）が左右両翼の知識人から生まれる基盤が生じた。こうして昭和期に，移植マルクス主義（スターリン主義）運動と知識人ナショナリズム運動が社会ファシズム運動へ吸引され，大衆のナショナリズムは支配層のウルトラ＝ナショナリズムすなわち農本主義や天皇主義に吸引された。

天皇制イデオロギーは支配層によって，もっぱら大衆のナショナリズムの心情の一面を逆立ちした形で吸い上げながら，一面で「社会経済」的には，

大衆のナショナリズムの社会的な基盤（農村）を資本制によって現実的につき崩すという両面を行使したのである。こうして憎しみは資本制社会に，思想の幻想は天皇制にというのが，日本の大衆ナショナリズムに与えられた陥穽であった。そして戦後，大衆のナショナリズムは，一種の「揚げ底」のうえで，戦後資本制の高度化から思想的な現実の基盤を侵蝕され（農村の資本制化の進行），根拠と主題を失っていると吉本は結論づけたのである。

以上で紹介した近代および戦後日本における天皇制の問題を農村の社会構造と関連づける視点は，きわめて妥当だと思える。近代日本においても敗戦後の農地改革に至るまでは，前近代的遺制が村落共同体ないし農村に残存していたことは事実であり，天皇制国家の構造的基盤となっていたのであった。すなわち近代日本の社会構造を吉本は，資本主義と農村をいわば下部構造とし，国家もそれに対応して資本主義と産業主義を管理運営しようとする経済的国家と，農村の社会構造に基盤を置く伝統的イデオロギーを体現した政治的国家の二重性において把握する[23]。そのアジア的特性が戦後の農地改革と資本主義の急速な高度化による農村構造の解体により急激に消失し，天皇制のイデオロギー的基盤は急速に失われ，80 年代後半のバブル時代にはまさに高度資本主義の中の農村の死が語られるまでになったのである（宮本，2015）。

それでは次に第 2 の問題，すなわち社会形成の理論における村落ないし農村の位置づけを吉本の共同体論の展開の中に見ていくことにしよう。

人間社会の形成の長い歴史過程において親族共同体が成立し，それが拡大し分化することによっていくつかの氏族共同体を形成し，そして地域的に近接する他の氏族共同体との相互行為が展開し，氏族共同体間の累積と支配の過程が進行する。氏族共同体の累積と支配の過程は部族国家形成の過程でもあり，吉本の 68 年の『共同幻想論』の対象ともなった歴史的過程であった。

23）吉本の国家論は「自立の思想的拠点」（雑誌『展望』65 年 3 月号）で初めて提示され，吉本（1966b）および吉本（1969a）に収録された。

同祖という部族的な幻想を保持した上での氏族共同体の部族的連携もあれば，他部族の氏族共同体も含めて，支配・被支配関係への組み込みによって形成される部族共同体もありうる。部族共同体がその内部で一層の支配・被支配関係を強化し統合が高度化すれば初期的な部族国家が成立するが，そのような部族共同体の大多数は村落共同体であり，それらの集積，支配・被支配関係の形成が農村社会を基盤とした伝統的国家の誕生につながっていく。

『共同幻想論』に発する共同体論への強い関心は，70年の『情況』に収録された「集落の論理」（吉本，1970：166−87）にもうかがえる。まず，古代日本のアジア的な土地制度として大化の改新によって成立した班田収受の法を取り上げ，この制度下での集落形成のありかたを問い，徐々に集落は田畑とは無関係な居住空間とならざるを得なかったこと，開墾田の私有が盛んとなり，集落はその中の有力な家族ないし親族をめぐって地理的にも共同体としても求心的なものに変質していった過程を推測している。そして集落概念には地理的な意味合いと共同体的意味合いがあることを指摘し，集落がはじめに家族または親族の共同性をもとにして形成されながら，国家以前の国家にゆきつく過程を，血縁共同体から地縁共同体へという歴史的な展開過程として把握しようとする。このようなアジア的な農耕共同体において集落の構成が変化してゆく指標となるのは，一つは集落内の個々の家族構成の変化の仕方であり，もう一つは集落内で農耕的な豪家を中心にその構成が求心的になるという点であると吉本は指摘する。アジア的な農耕共同体では，共同体の最高の権威に吸い上げられた公有以外は私有可能であるという意識があり，家族に私有の意識が生まれれば家族内部に絶対的な統御力をもった家父長が誕生したであろうし，その家父長制の成立に離反した親族の分離もあったであろうと吉本は推論し，また，都市と農村に両棲しているような独特な集落都市が成立するためには，手工業と農業の分離が家族内分業にとどまるという段階を脱することが不可欠であったと論じている。このように「集落の論理」には，『共同幻想論』での議論をアジア的共同体論として展開して

いこうという意図が示されており，これが80年代前半の『試行』連載論文「アジア的ということ」に受け継がれ，社会形成の理論の探究，共同体形成の理論の解明が以下のようにさらに進められたのであった（吉本，2013b：299−367，399−434）。

アジア的共同体の第一の特徴は農耕共同体であることであり，血族的に結び付き，共同体所有が主流で私的所有は限定されている。群れから，家族が析出し，群れ同士の相互行為が展開し親族レベルの原始的共同体から，氏族共同体としてのアジア的共同体へと展開する。

支配共同体と被支配共同体間の制度的関係は貢納制であり，支配共同体は被支配共同体の内部には踏み込まず，被支配共同体の支配者が，支配共同体ないしその支配者であるデスポットに農業生産物や労役を貢納するというシステムである。ここにアジア的専制とアジア的生産様式とが示される。このようなアジア的共同体の生産様式，その専制システムは近代化とは遠い存在であったが，相互扶助と親和性という，精神構造のなかで残っているアジア的な構造の利点を見逃してはならないと吉本は考える。それはアジア的な欠点と裏腹なものであった。

アジア的共同体とアジア的生産様式を基礎としたアジア的専制の特性について，マルクスは貢納制，武力による統合，治水潅漑の運営をあげていると吉本は確認し，アジア的ということを語る場合にはそれが前提になるとしても，それをアジア諸社会に覆いかぶせるのではなく，それを基準点として諸社会の差異を見出すほうが適切であるとする。こうして，日本では治水潅漑より祭祀による統合の方に重みが置かれ，これが日本的なアジア的共同体の特性であると吉本は結論づける。吉本は，マルクスによるアジア的の議論の特性を，大規模潅漑水利事業を遂行する中央専制国家と閉鎖的な農耕共同体群，征服王権としての中央専制国家，王権の交替とは無関係に存続する共同体群，貢納制，国家所有制度として描く。それは大陸の広大な砂漠や河川流域の広い低湿地帯をモデルにつくられているが，吉本は日本の場合は，それ

とは異なるアジア的な特性を示すと考える。支配共同体による土地所有と貢納制というアジア的特質は見られるが，大規模潅漑水利が不要のため大規模な中央専制国家は成立せず，他民族の征服による王権交替も経験せず，王権は祭祀的儀礼的宗教的制度を高い強度で張りめぐらし，農耕村落共同体は親族ないし氏族の閉じられた血縁共同体として持続し，非農耕共同体もまた閉鎖的に並立し共同体的構造が持続した。これが日本的なアジア的特質についての吉本の指摘である。そして，日本の農村が保持してきた日本的なアジア的特質こそ，伝統的な天皇制支配構造の基盤であったと吉本が見ていたことは，前述のとおりである。

## おわりに

本稿では宮本（2011）では取り上げることができなかった食についての吉本の著作と，十分に紹介できなかった農業論および村落共同体論について，内容紹介と吉本論におけるその位置づけと意義を明らかにすることを試みた。

まず，食にかかわる著作の内容は，高齢期の吉本自身によるライフヒストリーの回顧と現在的課題の認識を示すものとして，個人史研究に不可欠であることを改めて確認することができた。それらの著作の企画が高齢期の吉本に持ち込まれたのも，それまでの個人史研究の蓄積がそのような要請を生み出すまでになったためであろう。また，吉本における思想家と生活者との区別と連関の問題を考える際に，食をめぐる家族との間の微妙な関係についての吉本や娘の記述は非常に参考になろう。

次に，農業論であるが，高度資本主義，消費資本主義，グローバル資本主義の時代に現代日本で農業衰退は不可避であり，国家の介入による保護農政は無意味だという吉本の主張は，農業も農民も滅びてしまうがいいというとんでもない暴論と思われるかもしれない。しかし実はそうではなく，高度資本主義，高度消費文明とグローバル化に対応した新しい農業の展望は，消費

者の高度な要求に対応可能で，グローバルな競争にも勝ち抜ける農産物を先進的な技術の活用による新しい農業によって生み出そうという方向で明示されており，そのような主張は，吉本の超資本主義論や科学技術文明論によって裏付けられていたのであった。

最後に，村落ないし農村についての吉本の議論を，共同体論の展開として整理することができた。宮本（2011：224−31）では原初の社会形成過程や共同体累積の歴史過程に焦点を合わせたが，吉本は近代日本ないし現代日本の天皇制との関連で農村社会構造を問うという系列の共同体論も展開していた。そして，この二つの系列の共同体論の展開は，80 年代のアジア的についての議論に収斂し，さらに経済的国家と政治的国家の二重性による近代国民国家の把握という吉本国家論と深く関連していたのである。

宮本（2011）にもかかわらず，筆者が吉本論でやり残した領域は広大である。時間が許す限り今後もそれらに取り組んで行きたい。

## 参照文献一覧

石関善治郎，2005，『吉本隆明の東京』作品社。
――――，2012，『吉本隆明の帰郷』思潮社。
川上春雄，1972，「年代抄 1925−1972」『現代詩手帖』8 月臨時増刊「吉本隆明」。
高橋忠義，2003，「年譜：1972～2003」『現代詩手帖』臨時増刊「吉本隆明Ⅲ」。
――――，2012，「年譜：2003～12」，『現代詩手帖』5 月号「追悼総頁特集号吉本隆明」。
松崎之貞，2013，『吉本隆明はどうつくられたか』徳間書店。
宮本孝二，2011，『吉本隆明の社会理論』晃洋書房。
宮本孝二，2015，「戦後日本国家の変容――脱伝統化と高度近代化の中で」『桃山学院大学人間文化研究』第 2 号。
吉本隆明，1952，『固有時との対話』自費出版。
――――，1953，『転位のための十編』自費出版。
――――，1957，『高村光太郎』（初版）飯塚書店。
――――，1959a，『芸術的抵抗と挫折』未来社。

————, 1959b,『抒情の論理』未来社。
————, 1960,『異端と正系』現代思潮社。
————, 1963,『丸山真男論』一橋新聞社。
————, 1965,『言語にとって美とは何か』（2 巻本）勁草書房。
————, 1966a,『カール・マルクス』試行出版部。
————, 1966b,『自立の思想的拠点』徳間書店。
————, 1968,『共同幻想論』河出書房新社。
————, 1969a,『吉本隆明全著作集 13 政治思想評論集』勁草書房。
————, 1969b,『吉本隆明全著作集 12 思想家論』勁草書房。
————, 1970,『情況』河出書房新社。
————, 1971,『心的現象論序説』北洋社。
————, 1974,『詩的乾坤』国文社。
————, 1982,『「反核」異論』深夜叢書社。
————, 1984,『マス・イメージ論』福武書店。
————, 1985,『重層的な非決定へ』大和書房。
————, 1992,『大情況論』弓立社。
————, 1995a,『わが「転向」』文藝春秋。
————, 1995b,『母型論』学習研究社。
————, 1995c,『超資本主義』徳間書店。
————, 1997,『食べものの話』丸山学芸図書。
————, 1998a,『アフリカ的段階について』春秋社。
————, 1998b,『なぜ，猫とつきあうか』河出文庫。
————, 2005,『吉本隆明「食」を語る』朝日新聞社。
————, 2013a,『開店休業』プレジデント社。
————, 2013b,『完本 情況への発言』洋泉社。
————, 2015,『吉本隆明〈未収録〉講演集（3）農業論』筑摩書房。
————, 2017,『吉本隆明全集 37［書簡Ⅰ］』晶文社。
吉本隆明・吉本ばなな，1997,『吉本隆明×吉本ばなな』ロッキングオン。
よしもとばなな，2017,『すばらしい日々』幻冬舎文庫。

# YOSHIMOTO Takaaki on Foods, Agriculture, and Village Community

MIYAMOTO Koji

The many works of YOSHIMOTO Takaaki(1924–2012)who is regarded as the greatest thinker in post-war Japan have exerted extraordinary influence over the development of social theory. This paper aims to explore how he depicted his personal history through memories on foods in developmental stages of his life history, discussed problems of Japanese agriculture, and examined theoretical relations between community and social structure. The main findings are as follows.

First, when he entered into the elderly age, he began to remember memories on foods in his life history and published three books by editing essays on them. They showed his significant life stages in his personal history, his physical troubles caused by his habit of foods in the elderly age, and relationships with his wife and two daughters.

Second, insisting that the decline of Japanese agriculture was necessary, at the same time he showed the perspective of development of new agriculture responding to advanced capitalism, high technology and globalization. His discussions on Japanese agriculture were based on his own viewpoints of advanced capitalism and high technology.

Third, he developed the theory of agricultural village or community in two directions. The first direction was discussions about interrelations of agricultural villages and the Emperor system in modern Japan, and the second one was studies on communities in the formation of primitive societies in the Asian stage of the world history.

Keywords : YOSHIMOTO Takaaki, foods, agriculture, agricultural village, community